

潟かた語がたり (二十八)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

潟での水遊び

八竜橋のたもとにある武藤釣り具店の武藤守さんは昭和十五年生まれ。潟の八竜橋一帯が遊び場だったという武藤さんに子どもの頃の遊びについてお聞きしました。

上級生がしっかり面倒を見てくれたもんだ

水遊びができる季節になれば、毎日潟通い。大人は仕事で忙しいもんだが、子どもたちの面倒など見てられね。その親の役目を上級生がしていた。当時、小学生はほとんど素っ裸。今という海パンなのはいている子はほとんどいねがった。上級生や中学生は低学年の子どもが泳いでいけば事故が起きないようにしっかり監視しているし、泳げない子には泳ぎ方を教えたりしてな。だが俺らが小学二、三年の時でも安心して水遊びすることができたもんだ。上級生にこうして世話して貰ったもんだが、俺たちが中学生になれば同じように下級生の面倒を見るのは当たり前。今思えば、子どもたちに連帯感があったもんだな。

八竜橋の上から飛び込んだりして泳ぎ疲れた後はグンジ（ハゼ）踏み。これも先輩たちのやり方を見て覚えたもんだ。とにかくグンジがいっぱいいるもんだが、釣りなどする子どもないねえ。足でふんづけて獲ったほうが道具はいらねし効率もいいしな。

小学校も高学年になれば、今度はイカダ押し。これは廢船に



昭和28年頃。一向の船着き場。右の白い服の子が武藤守さん。その下が弟。みんなの手には大きなボラ。

なった潟船の側の板を外してイカダのようにしてしまう。このイカダの縁にモグを積み重ねてな。これで準備は完了。イカダを押しながら何人かで潟の中をバチャバチャ音を出しながら歩けば、ツブラッコ（ボラの子）がビツクリして飛び跳ね、その中の何匹かがイカダの中に落ちる。モグの土手があるが、ツブラッコは逃げられね。こうしてツブラッコをいっぱい獲ったもんだよ。

グンジもツブラッコも家に持って帰ってな。もちろん家の大切な食料よ。遊びといいながら、家の足しになるようなことをしていたんだな。